慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フランシスコ・アヤラの短編集における権力論
Sub Title	Representation of power in Francisco Ayala's short stories
Author	丸田, 千花子(Maruta, Chikako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.46 (2014.) ,p.69- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20141231-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランシスコ・アヤラの短編集における権力論

丸田　千 花 子

0. イントロダクション

作家であり社会学者でもあるフランシスコ・アヤラ（Francisco Ayala 1906–2009）は『夜明けの狩人』*El cazador en el alba*（1930）以来, 19年ぶりの1949年に2つの短編集,『簒奪者』*Los usurpadores* と『仔羊の頭』*La cabeza del cordero* を出版した[1)]。『簒奪者』は中世から17世紀のスペインを舞台にし，プロローグ “Prólogo”，エピローグの「死者たちの対話：スペイン哀歌」“Diálogos de los muertos: Elegía española”（1939），そして7つの短編――「神の聖ヨハネ」“San Juan de Dios”（1947），「病弱王」“El Doliente”（1946），「ウエスカの鐘」“La campana de Huesca”（1943），「ペテン師たち」“Los impostores”（1947），1969年に追加された「異端審問官」“El Inquisidor”（1950）「呪いをかけられた王」“El Hechizado”（1944），「抱擁」“El abrazo”（1945）――から成る[2)]。一方,『仔羊の頭』はスペイン内戦を舞台にし，「序」“Proemio”（1948），と5つの短編――「言伝（ことづて）」“El mensaje”（1948），「タホ川」“El Tajo”（1949），「帰還」“El regreso”（1948），「仔羊の頭」“La cabeza del cordero”（1948），そして1962年に追加された「名誉のためなら命も」“La vida por la opinión（1955）で構成される。2つの作品は独立した作品であり，時代設定も異なるものの，「現代の苦悩を描く」というテーマを共有している。アヤラ自身も『仔羊の頭』の「序」で,『簒奪者』は「現代の苦悩を異なるいくつかの過去に投影した小説」であり,『仔羊の頭』は「同じ苦悩を，それが生まれた生の現場に接近」させた小説であると述べている（15）。

スペイン内戦（1936–39）が終了して10年後に出版されたこの2つの短編集を契機に，アヤラは内戦前の前衛主義運動（Vanguardia バングアルディア）の影響を受けた実験的な小説から，社会の現実と問題を鋭く観察したリアリズム色が強い小説へと作風を転換さ

せた。この背景には，アヤラがスペイン内戦を経験したことが関係している。アヤラは作家であると同時に，社会学者であり，1931 年に発足した第二共和国政府の国会所属の弁護士として働き，内戦前からスペイン社会の変化と危機を目の当たりにしてきた。内戦後にアルゼンチンに亡命するが，そのアルゼンチン在住の 1940 年代前半から半ばにかけ，アヤラは生涯で最も多くの社会学の著作を出版した。代表作『社会における理性』*Razón del mundo*（1944）と『社会学研究』*Tratado de sociología*（1947）は，『簒奪者』と『仔羊の頭』の短編の執筆と並行して書かれた[3)]。これらの著書では，アヤラはギリシャ時代から現代にいたるまでの社会思想の歴史を紹介すると同時に，個人と社会権力との関係を幅広く考察している。

このように社会学者と作家の 2 足のわらじを履いていたアヤラの評価について，社会学者としてのアヤラを研究するアルベルト・リベス＝レイバ Alberto Ribes Leiva は，亡命直後からアメリカに渡る 1956 年までアヤラは社会学を体系的に研究しており，この時期に発表した小説に社会学的な視座は見られるものの，社会学と文学は融合していないと述べている（Ribes Leiva 2007: 280–281）。同じく社会学者のフリオ・イグレシアス＝デ＝ウセル Julio Iglesias de Usel も，アヤラの小説は社会の現実とその問題が提起されているものの，社会学とは異なる観点や手法で問題を提示していると指摘する（Iglesias 2006: 73）。このように社会学者アヤラの研究者たちは，アヤラの小説には直接的な社会学の研究が反映されていないとする。しかしアヤラの小説を分析すると，社会学者として現代社会の問題を探究しようとしたアヤラの顔がのぞいている。アヤラの妻であり，スペイン現代文学評論家のキャロリン・リッチモンド Carolyn Richmond が，アヤラは「眼の前の現実についての説明を試みようと常に模索している」（Richmond 2011: 16）と述べているように，スペインの眼前の現実――広くは権力と個人の関係，狭くは権力闘争の最たる結果であるスペイン内戦がもたらした現代社会の問題と危機――を小説の場でも示そうとしている。スペイン内戦を念頭に執筆された『簒奪者』と『仔羊の頭』は，スペインの歴史上の内戦や権力争いが引き起こす悲劇が描かれているが，両作品で提示した問題はスペインだけの問題ではなく，世界のどこでも起こりうる広く普遍的な問題であるとアヤラは捉えている。両作品では，些細な日常生活の中での争いが，やがて内戦や戦争といった大きな争いに発展していく過程を描いている。

両作品で提起するテーマについて，アヤラは各作品のプロローグで明らかにしている。まず『簒奪者』は「すでにそのタイトルで示されているが，［……］隣人に対して権力を行使することは常に簒奪行為である」（Ayala, 2011, 100）ということ，そして『仔羊の頭』

は「戦争を育んだ人間の情念」(15) である。両作品は，激情（情念）は人を簒奪行為に走らせ，場合によっては内戦や戦争を引き起こすことを描き，アヤラはそれを「人々の心の中の内戦」と称する。独立した作品でありながら，両作品の短編を検証すると，『簒奪者』で描かれた情景は時間，舞台，登場人物の設定を変えて『仔羊の頭』で再登場する。時と作品の枠を越えて，反復して登場する類似した情景を描く両作品の短編は，2 つの短編集がひとつの作品であるという前提で書かれたと考えられる。

本稿では，まず先行研究で研究者たちが指摘をしながらも詳細な検証を行ってこなかった両作品の関連性について明らかにするとともに，『簒奪者』に収録されている短編がどのように『仔羊の頭』で反復されて提示されているのかを考察する[4)]。次に両作品でアヤラが描こうとした「権力論」――権力と個人の関係――について，両作品の短編を事例にとって検証する。本稿の構成は，第 1 章がスペイン文学史のなかのアヤラの位置づけについて，第 2 章が文芸批評家としても活躍したアヤラの短編に対する考えについて，第 3 章がアヤラが両作品で描いた「権力」について，そして第 4 章が『簒奪者』と『仔羊の頭』の関連性について，となっている。

1. スペイン文学史の中のフランシスコ・アヤラ

約 40 年間の亡命生活を送ったアヤラをスペイン文学史の中でどのように位置づけるかは作家論，作品論（短編などの文学ジャンル），または作品のテーマによって異なる。それはアヤラがスペイン内戦をはさんで，作風を前衛派から社会的リアリズムに大きく転換させたこと，また内戦後，国内にとどまらず約 40 年間にわたる亡命生活を送ったことなどが影響している。アヤラは，内戦以前の作風から「25 年世代の前衛派の小説家」，アメリカ大陸での長期間の亡命生活から「亡命作家」，また内戦をはさんでの作家活動から内戦後の国内に残留した同世代の作家たちとともに「内戦世代の作家」と称されている。一方，作品の文学ジャンルから，短編小説の作家，またはスペイン内戦小説の作家とみなされる。さらに文学活動のみならず，社会学者としての業績も考慮して「知識人」として紹介される。

アヤラは前衛主義運動の作家として名前が挙げられるが，前衛主義の小説は内戦前の 4 作品のみ――『魂を抜かれた男の悲喜劇』*Tragicomedia de un hombre sin espíritu*（1925），『夜明けの物語』*Historia de un amanecer*（1929），『ボクサーと天使』*El boxeador y un ángel*（1929），『夜明けの狩人』*Cazador en el alba*（1930）――であり，活動期間も 1925

年から第二共和国政府に参加するため作家活動を一時休止するまでの 6 年間にすぎない[5)]。

これまでのスペイン文学史では，約 40 年におよぶ亡命生活からアヤラを「亡命作家」として紹介してきた。アヤラが国外に亡命した後に初めてスペインに彼とその作品を紹介したのは，ホセ・マーラ＝ロペス José Marra-López であり，その著書において，アヤラはマックス・アウブ Max Aub，ラモン・センデル Ramón Sender ら 7 名の亡命作家とともに紹介されている[6)]。しかし「文学の社会的役割」“Función social de literatura”（1987）においてアヤラは自分や国外に亡命した作家に対する「亡命作家」というレッテルに否定的な見解を示している。アヤラは「亡命した作家による文学」はあるが，「亡命文学」はないという（Ayala 2007: 56）。その理由は，一般的に作家たちが自分の経験を作品に投影するように，亡命作家たちは亡命者としての経験を自分の作品に投影しただけだからと説明する（Ayala 2007: 222）。さらに内戦前にスペイン文学界で名が知られ，評価されている自分のような作家たちを「ゲットー」に隔離して，国内の作家たちと異なる扱いをするのは誤りであり，批評家たちの問題だと指摘する（Ayala 2007: 228–29）。アヤラにとって「亡命文学」を容認することは，亡命した作家とフランコ政権下の国内にとどまった作家たちを区別することになるというのである。しかしアヤラがこの見解を示してから 30 余年経った現在でもスペイン文学史の一部の書は，いまだにアヤラを「亡命作家」という項目で紹介している。一方，21 世紀に入っての文学史では，アヤラは「前衛派の 25 年世代」または「内戦世代」として国内の作家とともに紹介されることが多い[7)]。

アヤラは初期のころから中・長編小説よりも短編を多く発表している。こうした点から短編小説の研究書で取り上げられることが多い[8)]。スペインでは 1940 年代前半は内戦の影響を受け，作家たちによる文学活動は低迷していたが，1940 年代後半から 1950 年代にかけて当時の社会の問題点をありのままに描いた社会派リアリズムの短編小説がブームとなる。しかし内戦直後の国内では経済状況が悪く，物資の不足により出版事情も悪かったため，作家たちにとっては単行本を出版するよりも文芸雑誌に投稿する方が容易だった[9)]。アルゼンチンからプエルトリコに亡命先を移したアヤラも 1961 年以降，国外からスペインの文芸雑誌 *Ínsula* などに短編を投稿し，再び母国でその名が知られるようになった（Casas 2007: 78）[10)]。またスペイン内戦の小説家という評価は『仔羊の頭』の高い評価による。ゴンサーロ・ソベハーノ Gonzalo Sobajano 1974 やガリース・トーマス Gareth Thomas 1990 らはアヤラを「内戦小説の作家」として紹介している。しかしアヤラが内戦を題材としているのは，『仔羊の頭』1 作品であり，また短編集であることで，中・長編の内戦小説の作家と同じような紹介のされかたは少ない[11)]。

一方，アヤラを社会学者，あるいは作家という枠組みで捉えるのではなく，「知識人」として紹介する文学史の書も増えてきている。アヤラ自身も，「何かを書くにあたり，自分の中では社会学者と作家の 2 つの立場を切り離して執筆したことはない」（Ayala 1972: 8）と明言しているように，社会学者と作家という区別をしていない。さらに「知識人」の役割について『社会における理性』（1944）で次のように述べている。アヤラによると，20 世紀大衆社会における知識人の役割は「危機を好機と捉え，歴史上重要な事実の意味を考え，その事実が示す永遠の課題を，そのときの社会情勢にそって真摯に考えること」（Ayala 2007: 410–411）」である。社会学者としてのこの意見は，知識人の役割を一般化して述べたものにすぎないが，実際，小説を通して「事実が示す永遠の課題」を「真摯に考えている」姿勢をアヤラが維持しつづけていることを勘案すると，この発言は自分に対しての言葉とも考えられる。そして危機が社会に対して示す永遠の課題をストレートに小説の場で表現し始めたのは本稿で取り上げる『簒奪者』と『仔羊の頭』である。

このようにアヤラに対する評価は多様であるが，スペインとアメリカ大陸の文化に精通している点や社会学者と文学者という複眼的な視点から執筆活動を続けてきた点から，「スペイン語圏の知識人」という呼び名が適切である。またスペイン文学史の中で位置づけをするならば，国外に亡命した作家と内戦後のフランコ独裁政権下にとどまった作家を含めた「内戦世代のリアリズムの作家」という位置づけがふさわしい。

2. 『簒奪者』，『仔羊の頭』と短編

アヤラは短編小説を多く発表していることから，本章ではその背景をアヤラの文芸批評を紹介しながら，『簒奪者』と『仔羊の頭』で果たす短編の役割について考察する。前章でアヤラは社会学者と作家の 2 つの顔をもつと述べたが，1955 年以降に住んだアメリカ合衆国では，大学でスペイン文学の教員として教壇に立つ傍ら，多くの文学評論を残し，文芸批評家という「第 3 の顔」を見せている。

短編の定義を最初に提示したのは，エドガー・アラン・ポオ Edgar Alan Poe とされる。ポオによると，天才作家がその力量を発揮できる文学ジャンルは「1 時間以内で読める長さの韻を踏んだ詩」だが，詩の次に適しているのが「半時間から 1，2 時間の間に読める短い散文による物語」である（ポオ 2009: 123–125）。詩と同様，「短い散文による物語」は読者に「印象の統一により強力な効果」を与えるが，それは短時間で読むことができるため読者が「外的な，また非本質的な影響」を受けることなく読書に集中でき，「魂

［が］深く震撼される」ほど強烈で持続的な印象を物語から得られるからである（ポオ 2009: 124）。

アヤラも，ポオと類似の見解を『物語構造に関する考察』*Relfexiones sobre la esctructura narrativa*（1970）で披露している。『物語構造に関する考察』の中で，アヤラはポオの見解に付け加える形で，小説（中・長編小説）と短編のちがいはその長さではなく，目的であると述べている。アヤラによると，小説は「登場人物の人生」，特に未来に開かれた人生の過程に焦点があてられ，短編は「ある状況」，つまりひとつの状況や事例を描写する。さらに短編は「ある状況」を語るという閉鎖的な「語り」であるが，小説は「語り」の比重が登場人物の人生とその過程におかれているため，読者は主人公についての情報にたどりつくことができる（Ayala 2007: 84–85）[12)]。そしてアヤラはこの見解を実際に『簒奪者』や『仔羊の頭』で実践していく。例えば「ペテン師たち」，「呪いをかけられた王」（以上『簒奪者』）や「言伝」（『仔羊の頭』）の主人公たちの行動は謎めいているが，それはアヤラが，彼ら主人公がたどってきた人生や詳細な人物像の紹介よりも，権力を前にした彼らの行動や「状況」の描写に焦点をあてているため，読者に主人公たちが行動を起こしている理由や背景に関する情報を十分に与えていないからである。

短編についての研究書を著したエンリケ・アンデルソン＝インベル Enrique Anderson Imbert も短編の特徴のひとつは「事例」を示すことであると述べている（Imbert 1991: 30）。アヤラもまた，短編で「ある状況」を描くのと並行して，複数の短編を集めた短編集を読者に提供することで，短編の数と同じ数の「事例」を提示することに成功している。『簒奪者』と『仔羊の頭』でも，各短編は互いに設定が異なるため，短編の数だけさまざまな人間模様が語られる。例えば『仔羊の頭』では作品のテーマでもある「人々の心の中の内戦」，つまり戦争を育む憎悪，嫉妬，憤怒などの激情に人々が突き動かされていく過程とそこに追い込まれた「状況」を描く。プロローグで『仔羊の頭』では「余計な副次的要素は一切排しているつもりだ」（14）と述べられているように，短編が描く主人公のおかれた状況に無関係な情報は一切排除されている。すべての短編では，「内戦」という共通項を除けば，舞台となる都市，主人公の職業，右派支持や左派支持という政治信条，そして家族構成も異なる。これはひとつの事例から内戦下の社会と人を描くのではなく，さまざまな事情を抱えた個別の「事例」を示すためである。一方，『簒奪者』では，異なる時代や場所で生きたスペイン史上の王，貴族，高位聖職者らが多く登場するが，この作品でもアヤラは，多種多様な事情――ときには意図的に，または不可抗力――で主人公たちが他者から権力を奪い，奪い返す様子を示している。

このように両作品でアヤラは数多くの「事例」を読者に提示し，多角的に権力や内戦をめぐる問題を投げかけているが，権力や内戦といった政治的なテーマを扱っているにもかかわらず，各作品では政治や外交情勢が詳細に言及されることはない。あくまでの主人公たちの日常生活での「ある状況下」での言動が語られている。これは，人間の権力への欲求，他者を支配したいという欲求は，日常の営みから出現するということを示唆している。また同時に，アヤラは社会と人との関係を，短編集と短編との関係になぞらえている。つまり，社会が多くの人々の生活や人生を集積してできたものであるとすれば，短編集は人々の日常生活を描いた短編を集積したものである。したがって『簒奪者』や『仔羊の頭』で描かれる内戦や戦争は，公的な場での政治的，思想的な対立に由来するというよりも，日常生活という私的な場で人々が抱く負の感情――嫉妬，憎悪，憤怒――に由来することを示している。そして読者は，両作品の短編の数と同じ数だけの事例から，アヤラが投げかける問題の普遍性を考えさせられるのと同時に，ポオが指摘するように各短編を「外的な，また非本質的な影響」を受けることなく短時間で集中して読むがゆえに，短編で示される事例から「魂が深く震撼される」ほど強烈な印象を受けるのである。

3. 『簒奪者』と『仔羊の頭』で提示される権力についての「総論」と「各論」

前章で示したようにアヤラは短編という形式を用いて，そして日常生活における権力に対する人々の欲求をさまざまな角度から描いている。『簒奪者』は読者にとって遠い過去に生きた権力者の簒奪行為，『仔羊の頭』は読者が身近なものとして共感できる市民の簒奪行為を描く。このように過去と現代という異なる時代を扱っているにもかかわらず，両作品の登場人物たちの言動には共通する点がみられる。過去と現代で繰り返される人々の営みから，アヤラは作品が問題にしている人間の倫理観や道徳観，権力と人との関係は永遠の課題であることを示唆している。本章では，2つの作品が描く「権力」について考察する。

両作品では，スペインが経験してきた内戦や対立――思想的，政治的，宗教的，身分上の対立など――を提示しながら，最終的に内戦後のスペイン社会と人々が抱える問題について明らかにしようとする。特に『簒奪者』では周知の歴史上のエピソードを用いながら，過去の権力者たち――ほとんどが実在の人物――が権力に翻弄される様子を描く。前述の通り，『仔羊の頭』の「序」において，アヤラは『簒奪者』が「現代の苦悩を異なるいくつかの過去に投影した小説」と言及しているが，この発言の真意を『簒奪者』のプロロー

グで述べている。

> この作品は既存の歴史を再検証し，新たな観点を読者に提示することを目的にしてるのではない。過去の時代と人物を題材にしたのは，こうした歴史の事例から物事の本質的な意味を引き出すためである。というのも物事の本質は現在の状況に影響を受けると，偏ったもの，そしてぼやけて見えにくいものになってしまうからである（103）。

『簒奪者』と同時期に書かれた『社会における理性』でも，アヤラは社会学の歴史をたどり，社会と個人の関係を検証したが，小説においても過去から現代をたどり，両者の関係を解き明かそうとしている。そしてアヤラが言及する「物事の本質」は両作品では「権力の本質」をさす。というのも，両作品を出版してから約 20 年後のエッセイで，『簒奪者』に収録されている「ウエスカの鐘」の例を挙げて権力についての見解を述べているからである[13)]。

> 人間が人間であることの結果，権力は必要悪だと私は思う。それは神話では堕落，または原罪として書かれている通りであり，人間を病人に変えてしまうものである。このように権力は地上の悪の象徴である。しかしそれを避けるすべはない。望まなくても権力を行使し，また権力によって苦しまなければいけない。権力の行使を回避すると，ただちに悪いことが起きてしまう。「ウエスカの鐘」でその例を描いたように，権力を行使しない人間は，そうした行動をとらないことよりも，さらに破滅的な結果を引き起こし，隣人を傷つけてしまう（Ayala 1972: 93–94）。

このように人間にとって権力は不可避であり，必要悪であると述べるアヤラは，『簒奪者』の 7 つの短編を通して，具体的な事例と状況を提示しながら，権力の実態を明らかにしようとしている。まずは家族関係（「神の聖ヨハネ」と「抱擁」）と主従関係（「病弱王」と「ウエスカの鐘」）における権力闘争を描く。次に権力を求めた結果の成功と挫折の例を「ペテン師たち」と「異端審問官」で描く。最後に「権力の実態とは」を「呪いをかけられた王」で問いかけている。『簒奪者』はフィクション部分はあるものの史実に基づき，上記のような権力の実態を 3 つのアプローチから明らかにし，権力に関する「総論」ともいえるべき事例を提示する[14)]。

権力に翻弄される主人公たちがたどる結末は各短編で異なるが，彼らがたどる結末から

「簒奪者」と「簒奪される者」は表裏一体であり，同時に誰でも状況次第では「簒奪者」になり得ることがわかる。例えば「病弱王」とこれに続く「ウエスカの鐘」では，国王に帰属する権利を簒奪する廷臣――有力貴族と聖職者――に対する国王の反撃を描いているが，「病弱王」のカスティーリャ王エンリケ 3 世（1379–1406，在位 1390–1406）も「ウエスカの鐘」のアラゴン王ラミーロ 2 世（1085–1154，在位 1134–37）も短編の冒頭では，病身の国王（エンリケ 3 世），または無気力な国王（ラミーロ 2 世）として登場し，統治者としての資質に欠けている人物と示唆されている。しかし彼らは，ある些細な出来事をきっかけに臣下に対して怒りを爆発させ，それまでの穏やかで無口な人柄を一変させ，謀略を用いて臣下を逮捕（「病弱王」），または処刑したり（「ウエスカの鐘」）する。王権を簒奪された国王は「簒奪者」である臣下が国王の権力を奪うという「簒奪行為」に報復する。また「抱擁」のカスティーリャ国王ペドロ 1 世（1334–69，在位 1350–69）は異母弟のファドリケ王子を裏切り者として謀殺した「簒奪者」として描かれるが，政争の結果，ファドリケ王子の兄でありペドロ王の異母兄でもあるエンリケ王子に暗殺され，「簒奪された者」として生涯を閉じる。

しかし一方で，簒奪行為により権力を手に入れても，良心の呵責や心理的葛藤から権力を心より享受できず，自分の行動に苦悩する主人公もいる。例えば，「異端審問官」の「私」は，改宗ユダヤ人ながらも異端審問官となるが，職務を忠実に果たそうとして，隠れユダヤ人の義理の弟を逮捕する。さらに父による叔父の逮捕を非難し，自ら隠れユダ人であることを示唆した実の娘までも異端者として処罰すべきかの決断を迫られて苦悩する。敬虔なキリスト教徒として信仰を守り異端審問官としての責務を忠実に果たすべきか，または大叔父のようにキリスト教の信仰を裏切り家族を助けるかで揺れた結果，最後は家族への愛よりも，異端審問官として人の心の奥の信仰心まで支配する簒奪者となることを選ぶ。『簒奪者』の主人公たちは，誰もが権力を求めて簒奪者として行動するものの，真の意味での簒奪に成功し，権力を享受する者はいない。彼ら主人公の言動は，人は誰でも「簒奪者」にも「簒奪される者」にもなりえて，両者の違いは紙一重であることを示す。

『簒奪者』で提示された権力についての「総論」の次には，『仔羊の頭』の短編が具体的な事例としての「各論」を示す。アヤラは『仔羊の頭』の「序」において，『仔羊の頭』の「タホ川」は「普遍的問題を一人物の主観に特化して描く」（16）と述べているが，これは「タホ川」にかぎらず，『仔羊の頭』のすべての短編にあてはまる。『簒奪者』が権力に関する普遍的問題を提示しているのであれば，『仔羊の頭』は個別事例を提示しているのである。

『仔羊の頭』は内戦下で市民が他者の権利を奪う「簒奪者」となる姿を描くが，同時に市民が内戦の犠牲者であることをタイトルでも表している[15)]。ここでいう犠牲者は，各短編で描かれる死者――例えば戦場や市街戦で戦死した人（「タホ川」），内戦直後の混乱の中で命を奪われた者（「帰還」「仔羊の頭」）――や内戦の敗者側の人々（「帰還」「名誉のためなら命も」）だけではなく，内戦の勝利者側の人々（「タホ川」「仔羊の頭」）も含まれる。このように『仔羊の頭』では勝者も敗者も，そして死者も内戦を生き抜いた生存者も内戦の犠牲者として描かれる。彼らは身体的に無事に生き延びたとしても，内戦の過酷な記憶から解放されないという精神的な葛藤を抱えたまま生きていかなければいけないのである。

例えば内戦の勝者側にいた主人公は「タホ川」のペドロ・サントラーリャと「仔羊の頭」のホセ・トーレスである。「タホ川」では，戦闘もない場所で偶然出会った共和軍の民兵を射殺した反乱軍の将校ペドロが内戦中に自分の行為を後悔し，罪の意識から遺族を訪ねて，贖罪から金銭的援助を申し出る。しかし申し出を拒否され，贖罪の機会を奪われる。「仔羊の頭」では，内戦中に保身のために伯父を見殺しにしたホセは，内戦後，出張先のモロッコで親族と仲間の身に降りかかった悲劇と彼らを裏切って生き延びたという過去を思い出すはめになり，戦後忘れていた良心の呵責に苦しめられる。勝利側の人間であっても自分のとった行動に翻弄される彼らは真の意味での内戦の勝者とはいえない。

一方，内戦の敗者たちは内戦でうけた心の傷を内戦後も抱えて生きることになる。「帰還」の主人公「私」は，内戦後亡命先から祖国への郷愁に耐えかねて 10 年ぶりに帰国したにもかかわらず，戦時中に共和国軍の民兵として敵側から追われた記憶が蘇る。故郷に戻っても誰かが自分を追跡しているという強迫観念が抜けず，再び祖国を離れる決意をする。「名誉のためなら命も」で登場するフェリーペは，共和派という理由で内戦後 9 年間近く自宅の地下に隠れていた体験を，苦労の末たどり着いた亡命先のブラジルで語る。敗者である彼らはペドロやホセのように良心の呵責に苦しむことはないが，内戦後の祖国に居場所はなく，祖国と離れた土地で生きていかざるをえない。

『仔羊の頭』でも『簒奪者』と同じように勝者と敗者の区別は曖昧であり，「権力」を前にしてあるのは，権力者と犠牲者，勝者と敗者という二者ではなく，「権力に翻弄される人々の悲劇」である。『仔羊の頭』で登場する主人公らは，平常時では罪なき市民だが，戦時下では一気に罪人となりうる行動をとる。こうした主人公の姿をアヤラは「罪深き潔白の者，潔白の罪人」（16）と称し，罪と潔白は紙一重であることを示唆している。

4.『簒奪者』と『仔羊の頭』：過去と現在の継続性

前章では『簒奪者』は権力の本質を３つのアプローチから考察している「総論」であり，『仔羊の頭』は３つのアプローチからの事例と述べたが，本章ではより具体的に両作品の短編がどのように呼応しているのかを考察する。特に両作品では対立の悲劇の萌芽が政治や戦争という大掛かりな舞台装置からではなく，日々の暮らしで生まれる様子を描いていることから，主人公と身近な人々との関係から両作品の関連性を提示する。

両作品では，主人公と対峙する相手は家族や「兄弟」という身近な人々である。ここでいう「兄弟」は単に血縁関係にある兄弟，従兄弟という狭義の「兄弟」だけではなく，友人や，故郷や国をともにする同胞という広義の「兄弟」も含む。例えば『簒奪者』の「神の聖ヨハネ」では女性をめぐる従兄弟同士の嫉妬と憎悪，「病弱王」では国王の乳兄弟への羨望，「ウエスカの鐘」では強大な権力を持していた兄王への畏怖と嫉妬，「抱擁」では主従関係にある国王と異母兄弟と憎悪を描く。『仔羊の頭』の「言伝（ことづて）」は８年ぶりに再会した従兄弟同士の反目，「タホ川」は二世代にわたる父子の不仲と同郷の隣人同士の殺し合い，「帰還」は竹馬の友の裏切り，「仔羊の頭」は親子，兄弟，幼友達，同郷の隣人，会社の仲間との決裂を描く[16)]。

『簒奪者』の「抱擁」でペドロ１世に向かって養育係のアルフォンソはその激しやすい性格をいさめて「激情は言葉も危険も抑えることができない」（223）と述べるが，ペドロ１世をはじめとする『簒奪者』の主人公たちがみせる権力への欲求と敵に対する激情は，現代の「簒奪者」である『仔羊の頭』の主人公たちに引き継がれる。また『簒奪者』のテーマや登場人物の背景や状況は，作品の枠と時間を超えて『仔羊の頭』で再現されていく。例えば，『簒奪者』の「神の聖ヨハネ」に登場するアモール家の従兄弟の間にある嫉妬と羨望は，『仔羊の頭』の「言伝」に登場するロケとセベリアーノの従兄弟の間にみられる。「言伝」のロケは「意地の悪い虚栄心と嫉妬に満ち溢れた男」（17）で，何年も休みなく地方をどさ周りする身体もガタガタの営業マンである。８年ぶりに故郷の従弟セベリアーノと再会するが，自分と比べて叔父の店の後継者となり，何不自由なく暮らす彼に嫉妬し，羨む。その嫉妬の裏返しで村を出たことのない従弟を馬鹿にし，虚栄心から海外にも出張した経験があると嘘をつく。ロケが物語で露呈させる「虚栄心」と「嫉妬」の感情は「神の聖ヨハネ」のフェリーペ・アモールにも見られる。アヤラによると，「言伝」は内戦前と思われる時代を描いているが，虚栄心や嫉妬が後にもっと大きな対立を生むという点で，彼らは「すでに内戦を生きてしまっている」（15）。

『簒奪者』の「病弱王」では，病身のため自分の身体もままならないおとなしいエンリケ3世が，危機的な状況下で自分から権力を奪った臣下に対して「怒れる」簒奪者となるが，これに類似しているのは，『仔羊の頭』の「タホ川」である。「タホ川」は「無実有罪の混同というテーマが，自分の行為を反省する主人公の自意識のドラマとして繰り返し現れる」短編である（16）。ブルジョワ家庭に育つ主人公ペドロは「軟弱で友達の少ない夢想家」（17）であり，おとなしく気弱な性格の持ち主である。子ども時代，近隣に住む貧しい労働者の子どもから通学路で動物の糞を投げつけられるなどしつこくからかわれ，反撃を試みものの，失敗して家に逃げ帰るような人物である。さらに学校の悪友の密告で愛犬がひどい殺され方をされたのを知ったときも悪友を追求して犯人を見つけるだけの勇気もなく，家で働く女中が夫に暴力を振るわれるのを助けようと正義心から母に相談したときも，夫婦の争いに関わらないようにと諭され，仲裁をあきらめるような性格である。自分や身近なものを守ろうとしてもかなわなず，彼の怒り，屈辱，諦観は表出することなく，長年胸の内に仕舞いこまれる。こうした長年抑え込まれた感情は，戦闘のない前線で同郷の労働階級の共和国軍民兵と偶然出くわしたときに，恐怖からくる暴力行為として表れ，出会い頭に彼を射殺する。前線の片隅の静かなブドウ園での民兵の殺害は自分の身を守るための行為だったが，ペドロは敵を倒した高揚感よりも無実の兵士を殺した罪の意識に苛まされる。そして内戦後，再び元のおとなしい男に戻り，遺族に対して贖罪をしようとするが拒否される。「タホ川」で描かれたペドロの広義の「兄弟殺し」は，「タホ川」の主人公と同じ名前をもつ『簒奪者』の「抱擁」のペドロ王が異母弟ファドリケ王子を殺害した事件と似ている。ペドロ王は父王の遺言に従ってファドリケ王子と和解しようとするが，自分に会いにきた王子を裏切り者と誤解し，怒りに身をまかせて王子に弁明の機会を与えずに殺してしまう。

『簒奪者』の「呪いにかけられた王」は「権力の実態は無である」というテーマをもつ。尊敬するスペイン国王カルロス2世との謁見を求めて，はるばる南米から父の母国にやってきたゴンサレス＝ロボは，延々と続く宮廷内の手続きに苦労しながら，ようやく国王との謁見を実現させる。しかし謁見すると，権力の象徴たる国王は統治できるような知能をもつ人物でないことがわかる。この短編でアヤラは，実体のない権力に主人公が振り回される様子を描いているが，この短編と類似しているのが，『仔羊の頭』の「帰還」である。主人公「私」は，10年ぶりに帰国した故郷で，幼馴染のマヌエル・アベレードが内戦中に自分を逮捕しようとした事実を知る。当初，その理由に心当たりはなかったが，記憶をたどると，貧しい家庭の出身のアベレードが自分を羨み，妹と結婚させる計画を立ててい

たことに気づく。しかし「私」にはすでに婚約者がいたため，アベレードの試みはとん挫し，内戦中に右派の反乱軍のスパイとなったアベレードは私怨を晴らすため，左派の共和国支持者の「私」を逮捕しに来たのだった。友人の理不尽な仕打ちに驚きながらも，彼の裏切りを追求したいという意地の悪い復讐心にかられ，「私」は敵方のアベレードを恐れながら探すが，彼は内戦中に何者かに暗殺されていた。内戦の勝者側のアベレードの存在に怯えながら彼を探した時間と労力は「無駄」に終わったが，アベレード自身もすでにこの世では「無」の存在となっていた。この2つの短編が描くのは，実体が見えない権力は，人々を恐れさせる力をもつが，実は権力の実体は「無」であり，「強大な力」は人々が作り出しているイメージにすぎないということである。

また「呪いをかけられた王」は他の短編と異なり，直接的に「簒奪」というテーマを扱っていないが，『仔羊の頭』の「名誉のためなら命も」も内戦時の具体的な人々の対立について描いていない。「名誉のためなら命も」では，共和派のフェリーペは内戦後の共和派に対する粛清を逃れるため，9年間自宅の寝室の床下に隠れる。その間，時間をつぶすために辞書から「希少名詞と希少形容詞を抜き出し，それだけを使ったチンプンカンプンな文章」でもって「意味をなさない不条理な物語」を書きつづける（アヤラ 2011: 245–46）。この手稿は，フェリーペの存在が世間では無いものとされ，内戦によって簒奪された9年にわたる「空虚な年月」の証拠である。「呪いをかけられた王」のゴンサレス＝ロボも国王との謁見を実現させるために無為な時間を過ごすが，フェリーペもまた内戦によって9年間という無為な時間を過ごす。

短編「仔羊の頭」では，あらゆる人間関係における対立――兄弟，叔父と甥，従兄弟，会社の上司と部下，同僚同士の対立――が凝縮されて描かれており，『簒奪者』の主人公たち全員の姿を見出すことができる。「仔羊の頭」の主人公ホセは「知的で皮肉っぽく人を見下した悪賢い男」である（17）。『仔羊の頭』の他の主人公たちが信念をもって内戦中に反乱軍派と共和派を選んだのと異なり，ホセは居住していたマラガの町が内戦当初，共和派だったことから主義主張もないまま共和派となり，労働委員会の一員として勤務先の上司を見下す。しかしその後，町が反乱軍に占拠されると，父の兄であるヘスース伯父が共和派の無頼漢に殺されたことを利用して反乱軍派に転向し，その際に共和派として共に活動した同士らが反乱軍に連行されるのを黙って見送る。またヘスース伯父は「古風で頑固な，猛烈な伝統主義者」（185）であり，信念を曲げなかったために「赤のごろつきども」に殺害されるのだが，彼の暗殺は助けを求めた伯父をホセが自分の保身のためにあえて助けなかった結果だった。ホセが自分の地位や身分を守るために家族や同僚を見捨てる

という点で，『簒奪者』に登場する「異端審問官」の主人公「私」と共通する部分がある。

5. 結論

アヤラはその生涯において，ヨーロッパとスペインが経験した2回の世界大戦とスペイン内戦という危機を経験する。その経験から，スペイン社会の危機と問題について，そして「権力とは何か」という普遍的な問題を2つの短編集で描くことを試みた。『簒奪者』で描かれた歴史上の人物による簒奪行為は時代と作品の枠を超えてスペイン内戦を題材とした『仔羊の頭』で再提示されている。2作品が文学の場で「権力」について考察するひとつの方法だとすると，『簒奪者』は過去における「権力」をめぐる諸相を描く「総論」，『仔羊の頭』は現代の内戦に巻き込まれる市民の日常の事例を提示する「各論」とみなすことができる。本稿で示したように，両作品は独立した短編集でありながらも，ひとつの作品として取り扱うことがふさわしく，また『簒奪者』と『仔羊の頭』で使用された短編という形式は，多種多様な人間のドラマを提供することで，権力の問題を偏向した視点からではなく多様な視点から検証することを可能にしている。

しかし権力をめぐる諸相を明らかにしようとするアヤラの試みは，この2作品だけでは終わらない。アヤラは再び「権力」の問題について，『犬死』*Muertes de perro*（1958）と『コップの底』*El fondo del vaso*（1962）で取りあげる。『簒奪者』と『仔羊の頭』と異なり，舞台を20世紀の独裁政権下のラテンアメリカに移した両作品では，「社会における自由」というテーマが加わる。アヤラの初期の社会学の著書には『自由主義の問題』*El problema del liberalismo*（1943），『自由の歴史』*Historia de la libertad*（1943），そして『自由についてのエッセイ』*Ensayo sobre la libertad*（1944）など「自由」をタイトルにしたものが多いが，『犬死』と『コップの底』でも社会学者として研究してきた問題が，再び小説で提起されるのである。

このように『簒奪者』と『仔羊の頭』で描かれた「権力，簒奪，情念」は引き続き普遍的な問題として次作に引き継がれ，アヤラは，小説において社会学者として，作家として，そして「20世紀スペイン語圏の知識人」として，歴史上の事実が示す永遠の課題と真摯に向き合う姿勢を持ち続けているのである。

註
＊本稿執筆にあたり平成25年度慶應義塾学事振興基金（個人研究）による研究補助を受けた。

＊本稿における言及・引用に関しては文献に挙げた版からとり，（　）内に著者，出版年と当該頁を示した。ただし『簒奪者』に係る引用はすべて *Los usurpadores*. Madrid, 2ª ed. Cátedra, 2002，『仔羊の頭』に係る引用はすべて邦訳（現代企画室 2011 年）に依り（　）内に当該頁を示した。邦訳以外の引用は紙面の都合から原文は省略し，論文著者による訳を示した。また［　　］は論文著者の補足である。

1）　アヤラの社会学者としてのキャリアは，マドリード大学法学部卒業後，1 年間のベルリン大学への留学で社会学を学ぶときから始まる。ドイツから帰国後はマドリード中央大学（現：マドリード・コンプルテンセ大学）法学部の教員となり，第二共和国政府では国会所属の弁護士，内戦中は外交官として働いた。内戦終了直前の 1939 年 1 月バルセロナからパリに行き，そこからキューバを経由してブエノスアイレスに渡った。亡命先のアルゼンチン（1939 ～ 1950），プエルト・リコ（1950 ～ 1954），そしてブラジルのリオデジャネイロ（1945）では大学の社会学の教員として教壇に立った。その後 1955 年にアメリカに移ってからはシカゴとニューヨークの大学でスペイン文学を教え，主に文学評論を中心に発表した。スペインには独裁政権下の 1967 年から毎年帰国していたものの，アメリカを引き払い最終的に帰国するのは民主化後の 1976 年だった。

　両作品はブエノスアイレスのそれぞれ異なる出版社――『簒奪者』は Sudamericana 社，『仔羊の頭』は Losada 社――から出された。アヤラの日記から両作品を書き終えた時期は，プロローグの日付と一致する。1948 年春に『簒奪者』，同年夏に『仔羊の頭』を完成させた（Richmond 2002: 16, 20）。また「死者たちの対話」（1939）と「異端審問官」（1950）以外の『簒奪者』の短編は 1943 年から 1947 年にかけて毎年執筆され，これらに続き「名誉のためなら命も」（1955）以外の『仔羊の頭』の短編が 1948 年と 1949 年に執筆された。

2）　以下の短編はすでに本として，または文芸雑誌で発表された。「呪いをかけられた王」（1944）は単行本として Emecé 社から出版された。「死者の対話」（63 号 1939 年 12 月）と「ウエスカの鐘」（106 号 1943 年 8 月）はアルゼンチンの文芸誌 *Sur* に掲載された。「異端審問官」は *Cuadernos americanos*（1 巻 2 号 1950 年 3–4 月）に発表され，1969 年に『全集』が出版された際に，新たに追加された。アヤラはすでに出版した社会学の著作や小説の構成を再出版する際に変更することが多い。『簒奪者』や『仔羊の頭』もその例にもれず，出版年や出版社によって，完全版以外の短編が加えられることがある。『簒奪者』および『仔羊の頭』の詳細な出版歴と書誌情報は Ayala 2012: 1514–1516 を参照のこと。

3）　1949 年までに出版されたその他の主な社会学の著書は次の通りである。*El problema del liberalismo*（1943），*Oppenheimer*（1943）*Historia de la libertad*（1943），*Los políticos*（1944），*Ensayo sobre la libertad*（1944）。本稿註 2）で述べたようにアヤラは著書の再構成を社会学の著作でも行い，『社会における理性』は 1962 年に再版，後に一部が *Hoy ya es ayer*（1972）に収録され，『社会学研究』は 1947 年の初版の他に 1968 年と 1983 年に改訂版を出している。社会学の著書，論文，エッセイの書誌情報については Ayala 2009: 1173–1180 を参照のこと。

4）　『簒奪者』および『仔羊の頭』の先行研究はスペイン国内外の研究者によってなされ，両作品とも短編集としての作品研究，各物語の研究論文が数多くある。作家だけでなく社会学者，文芸評論家としてのアヤラの研究書は Irizarry 1977，また論文集では García Montero 2011 が挙げられる。作家としてのアヤラの研究はと Ellis 1964 と Irizarry 1971 があり，後者は各作品を横断したテーマの設定しての研究書である。アヤラの社会学と小説で表象されている「権力」についての研究書は，

Mermall 1984 があり，社会学者アヤラが考える「権力への意志」を考察したものに Gómez Gay 2011 がある。本稿では触れないが，セルバンテスとアヤラの類似性を考察した研究書もある（Escudero Martínez 1989）。

『簒奪者』の研究は Amorós 1970, 1978 が代表的であり，各短編についての研究論文もある。「病弱王」は唯一出典が明らかにされていないが，Sobejano 2012 が 1977 年にその論文で 17 世紀に書かれた P.Juan de Mariana の *Historia general de España* との類似性を指摘している。「ウエスカの鐘」の研究には Zuleta 1994 がある。「呪いをかけられた王」は前述した Escudero Martínez 1989 が語りの技法について特に詳しく考察している。「異端審問官」は Rodríguez Alcalá 1964 と Sherzer 1977 のものがあり，「抱擁」については Orringer 1977 が「手」が権力を表すとして考察している論文がある。María Victoria Martínez 2011 は両作品の物語に共通するモチーフをいくつか挙げて両作品の関連性を論じる。

『仔羊の頭』の先行研究は拙稿 2012：198–199 を参照されたい。

5） 前衛主義 Vanguardia 時代の作品の研究論文を集めたものに Vázquez Medel が編集した *Francisco Ayala y las Vanguardistas*（1998）がある。

6） *Narrativa española fuera de España*（1939–1961）では 8 名の亡命作家とその作品が研究されている。アヤラはアウブとロサ・チャセル Rosa Chacel とともに「25 年世代」の章で紹介され，8 名の中でも最も詳細にその作品が論じられている。

7） Soldevila Duarte の *Historia de la novela española (1936–2000)*（2001）ではアヤラはその作風から前衛派文学の作家の章，また内戦後から 1950 年代までの世代の章で登場する。アウブやセンデルが亡命作家として異なり，アヤラを「知識人」として紹介しているのは，Jordi García y Domingo Ródenas の *Historia de la literatura española*（2011）である。

8） ヨーロッパの他国と同様，スペインの短編小説は 19 世紀に流行する。短編小説の文学史に関する研究書は 19 世紀を中心としたものが多く，*Historia del cuento español (1764–1850)*（2004），*The Nineteenth-Century Spanish Story*（1985），98 年世代を中心に研究した *Estructuras y técnicas narrativas en el cuento literario de la Generación del 98: Unamuno, Azorín y Baroja*（1996）などがある。一方，内戦後に活躍する作家たちについての代表的な研究書には Erna Brandenberger の *Estudios sobre el cuento español actual*（1973）があり，アヤラは「内戦世代」として国内外の作家たちとともに紹介されている。スペイン文学史全体の中のスペインの短編について中世から 20 世紀半ばまでの簡潔な歴史は Anderson Imbert; Kiddle 1961 を参照のこと。

9） Barrero Pérez は 1950 年代に入り，Camilo José Cela，Camen Martín Gaite，Miguel Delibes など，後に活躍の場を短編以外に広げた作家たちの多くがこの時期に短編を雑誌に掲載したと述べる。また短編は日常生活の現実を表現しているのに適しているとして作家たちに好まれた（Barrero Pérez 1992: 122）。

10）1948 年から 1969 年にかけて文芸誌に投稿された短編小説を包括的に研究した Casas によると，1956 年までは，*Ínsula* に投稿された亡命作家の短編の質はよくない場合があり，彼らの著書に関する書評も同じだった。1950 年に Ricardo Gullón が『仔羊の頭』を絶賛した書評を書いたが，検閲の圧力が原因のためか，一部曖昧になった部分が見られた（Casas 2007: 69）。

1961 年から 1969 年にかけてアヤラが投稿したのは *Ínsula* と Camilo José Cela が創刊した *Papeles de Son Armandas* の 2 誌であり，合計 8 編である（Casas 2007: 290）。雑誌ごとに挙げると，*Ínsula*

には “El prodigio”（1961），“Lección ejemplar”（1963），“Magia”（1968），“El leoncillo de barro negro”（1969）の 4 編が，*Papeles de Son Armandas* には “Baile de máscaras（*Un ballo in maschera*）”（1961），“Una boda sonada”（1962），“Diálogo entre el amor y un viejo”（1967），“La Pascua Florida”（1969）の 4 編が収録されている。“El prodigio” と “Una boda sonda” は *La niña y otros retratos*（2001）に，他はすべて 1972 年 Premio de la Crítica の受賞作である『快楽の園』（*Jardín de las delicias* 1971）に収録されている（Casas 2007: 170）。アヤラの *Ínsula*，および *Papeles de Son Armandas* に投稿した短編についてはそれぞれ Casas 2007: 74–75，170 を参照のこと。

11）Sobejano は，*Novela española de nuestro tiempo* で 1940 年代以降の作家を研究している。その第 1 章でスペイン内戦を小説の題材とした国内外の作家を紹介しており，アヤラ，アウブ，センデルも取り上げている。さらに最終章では第 1 章では紹介が不十分だったとして「亡命作家」の章を立て，3 人の内戦後の作品を紹介している。最近の研究では María Ángeles Naval がセンデルと Luis Cernuda の作品とともにアヤラの『仔羊の頭』を取り上げ，そこで描かれている内戦の記憶について論じている（Naval 2010: 131–147）。

一方，内戦作家としてのアヤラは，スペイン国内外の作家による内戦小説を詳細に研究した Maryse Bertrand de Muñoz の著書に『仔羊の頭』は取り上げられていない。Bertrand de Muñoz の研究書にアヤラの名前がないように，通常「スペイン内戦小説」を論じるときには短編小説が含まれない場合が多い。Thomas もその著書で「スペイン内戦小説」を定義するに際し，いくつかの条件を述べているが，「短編で書かれた小説を除く」と記している（Thomas 1990: 1）。しかし Thomas は『仔羊の頭』は統一的な主題で短編集が構成されているとして，短編ではなく短編集というひとつの作品として他の内戦小説と同様に研究している。短編が除外される理由は明確に述べられていないが，内戦の時系列的な経過を表すには，登場人物の数，時間軸や空間が限られる短編では難しいためだと推察される。

『簒奪者』が歴史上の人物とエピソードを題材としていることから歴史小説として研究されることもある。Mercedes Juliá の *Las ruinas del pasado*（2006）では 1 章を割いて『簒奪者』が分析されているが，こうした扱いは珍しい。

12）ここでアヤラが例として挙げているのが，『ドン・キホーテ』前篇 51 章「山羊使いの話」で登場する盗賊ビセンテ・デ・ラ・ロカの謎めいた行動である。彼の謎めいた行動は，兵士であるものの，盗みに入った家で金品をことごとく奪ったにもかかわらず，娘の貞操を奪わなかったという点であり，ビセンテの人生に関する情報が提示されていないことで，この不思議な行動の説明がつかないとアヤラは述べている（Ayala 2007: 84–85）。

13）Thomas Mermall によると，アヤラの「権力」に対する考えは内戦前の小説 *Historia de un amanecer*（1926），「ウエスカの鐘」や “Azaña, un destino trágico”（1980）でも明らかであると述べる（Memall 1984: 182）。

14）Richmond が提示した『簒奪者』内の短編の組み合わせは，「ウエスカの鐘」と「呪いにかけられた王」，「病弱王」と「抱擁」，「ペテン師たち」と「神の聖ヨハネ」である。「異端審問官」は後に追加されたことを理由に別に考察を加えている（Richmond 2011）。Amorós は短編同士を組み合わせていないが，「病弱王」と「ウエスカの鐘」はペアであり，「異端審問官」は「ペテン師たち」のバリエーションであると述べる。（Amorós 1978: 20–21）。Juliá は本稿で示した組み合わせを提示しているが，詳細な分析はしていない（Juliá 2006: 70）

15）「仔羊」は新約聖書では「迷える人」「信徒」を示すが，モチーフとしては「犠牲動物」として登場することが多い，この場合も作品全体のテーマから内戦の犠牲者を示唆していると考えられる。キリスト教にかぎらず宗教では「仔羊」は従順さをあらわし，しばしば生贄の動物として，また贖罪の象徴として登場するが，この短編集でもさまざまな内戦の犠牲者が登場する。

16）『仔羊の頭』で描かれた「兄弟」の対立についての考察は拙稿「『仔羊の頭』が描く内戦の全景と断片」（2012）を参照のこと。

引用文献

Amorós, André. “Prólogo a *Los usurpadores*”. Ayala, Francisco. *Los usurpadores*. Barcelona, Andorra, 1970, pp. 7–18.

——. “Introducción”. Ayala, Francisco. *Los usurpadores*. Madrid, Espasa-Calpe, 1978, pp. 9–26.

Anderson Imbert, Enrique; Laurence B. Kiddle. “El cuento en España” (1961)”. *Cuentista del siglo XX*. Vallejo, Catharina V. de. ed. Barcelona, Editorial Vosgos, 1989, pp. 17–32.

Anderson Imbert. *Teoría y técnica del cuento*. Barcelona, Ariel, 1991.

Arregui Zamorano, María Teresa. *Estructuras y técnicas narrativas en el cuento literario de la Generación del 98: Unamuno, Azorín y Baroja*. Pamplona, Universidad de Navarra, 1996.

Ayala, Francisco. *Confrontaciones*. Barcelona, Seix Barral. 1972.

——. *Los usurpadores*. Madrid, 2ª ed. Cátedra, 2002.

——. *La cabeza del cordero*. 6ª ed. Madrid, Cátedra, 2006.（『仔羊の頭』松本健二・丸田千花子訳．現代企画室，2011 年.）

——. *Obras completas: Estudios literarios*. vol. 3. Barcelona, Galaxia Gutenberg: Círculo de lectores, 2007.

——. *Obras completas: Sociología y ciencas sociales*. vol. 4. Barcelona, Galaxia Gutenberg: Círculo de lectores, 2008.

——. *Obras completas: Ensayos políticos y sociológicos*. vol. 5. Barcelona, Galaxia Gutenberg: Círculo de lectores, 2009.

——. *Obras completas: Narrativas*. vol. 1. Barcelona, Galaxia Gutenberg: Círculo de lectores, 2012.

Barrero Pérez, Óscar. *Historia de la literatura española contemporánea (1939–1990)*. Madrid, Istmo, 1992.

Bertran de Muñoz, Marysé. *La guerra civil española en la novela: bibliografía comentada*. Madrid, J. Porrúa Turanzas, 1982.

Brandenberger, Erna. *Estudios sobre el cuento español actual*. Madrid, Editora Nacional, 1973.

Casas, Ana. *El cuento español en la posguerra: presencia del relato breve en las revistas literarias (1948–1969)*. Madrid, Marenostrum, 2007.

Charnon-Deutsch, Lou. *The Nineteenth-Century Spanish Story*: *Textual Strategies of a Genre in Transition*. London, Tamesis, 1985.

Ellis, Keith. *El arte narrativo de Francisco Ayala*. Madrid, Gredos, 1964.

Escudero Martínez, Carmen. *Cervantes en la narrativa de Francisco Ayala*. Murcia, Universidad de Murcia, 1989.

García, Jordi; Domingo Ródenas, eds..*Historia de la literatura española*. Madrid, Crítica, 2011.

García Montero, Luis; Rodríguez Gutiérrez, M., eds. *De este mundo y los otros: estudios sobre Francisco Ayala*. Madrid, Visor Libros, 2011.

Gómez, Gay. “El poder como voluntad de dominio según Francisco Ayala”. *De este mundo y los otros: estudios sobre Francisco Ayal*a. García Montero, L.; Rodríguez Gutiérrez, M., eds. Madrid, Visor Libros, 2011, pp. 139–153.

Iglesias de Usel, Julio. “Francisco Ayala, desde la sociología”. Francisco Ayala, sociólogo. Campo, Salustiano del, ed. Madrid, Instituto de España, 2006, pp. 61–83.

Irizarry, Estelle. *Teoría y creación literaria en Francisco Ayala*. Madrid, Gredos, 1971.

——. *Francisco Ayala*. Boston, Twayne, 1977.

Juliá, Mercedes. *Las ruinas del pasado: aproximaciones a la novela histórica posmoderna*. Madrid, Ediciones de la Torre, 2006.

Marra-López, José. *Narrativa española fuera de España (1939–1961)*. Madrid, Guadarrama, 1963.

Martínez, María Victoria. “Escribir el pasado, proyectarse al porvenir: una lectura integradora de *Los usurpadores* y *La cabeza del cordero*”. *De este mundo y los otros: Estudios sobre Francisco Ayala*. García Montero, L.; Rodríguez Gutiérrez, M., eds. Madrid, Visor Libros, 2011, pp. 69–89.

丸田千花子「『仔羊の頭』における内戦の全景と断片」，『イスパニカ』56 号，2012 年，pp. 183–203.

Mermall, Thomas. *Las alegorías del poder en Francisco Ayala*. Madrid, Editorial Fundamentos, 1984.

Naval, María Ángeles. *Cuestión de memoria: estudios sobre Ramón J. Sender, Luis Cernuda y Francisco Ayala*. Zaragoza, Institución Fernando El Católico, Diputación de Zaragoza, 2010.

Orringer, Nelson. “La mano y el cetro en *Los usurpadores* de Ayala”. *Cuadernos americanos*. 1977, vol. 329–330, pp. 495–510.

ポオ，エドガー・アラン．「ホーソーンの『トワイス・トールド・テールズ』」，『ポオ評論集』八木敏男編訳，東京：岩波書店 2009，pp. 117–134.

Ribes Leiva, Alberto. *Paisajes del siglo XX: sociología y literatura en Francisco Ayala*. Madrid, Biblioteca Nueva, 2007.

Richmond, Carolyn. “Raíces de la (re)creación: reflejos del exilio en *Los usurpadores*”. *De este mundo y los otros: estudios sobre Francisco Ayala*. García Montero, L.; Rodríguez Gutiérrez, M., eds. Madrid, Visor Libros, 2011, pp. 15–39.

Rodríguez Alcalá, Hugo. “El cuento ‘El Inquisidor” de Francisco Ayala”. *Revista Hispánica Moderna*. 1964, vol. 30 no. 1, pp. 20–34.

——.*Ensayos de Norte a Sur*. Seattle, University of Washington Press, 1960.

Rodríguez Gutiérrez, Borja. *Historia del cuento español (1764–1850)* Madrid, Iberoamericana, 2004.

Sherzer, William. “Ironía y heroísmo en ‘El Inquisidor’”. *Cuadernos americanos*. 1977, vol. 329–330, pp. 477–480.

Sobejano, Gonzalo. *Novela española de nuestro tiempo*. 1970. Madrid, Marenostrum, 2003.

——. “Lectura de ‘El Doliente’”. *Lecturas de Francisco Ayala*. Granada, Editorial Universidad de Granada/Fundación Francisco Ayala, 2012, pp. 41–72.

Soldevila Duarte, Ignacio. *Historia de la novela española (1936–2000)*. Madrid, Cátedra, 2001.

立石博高・中塚次郎編．『スペイン史 1』東京，山川出版社，2008.

Thomas, Gareth. *The Novel of the Spanish Civil War (1936–1975)*. Cambridge, Cambridge University Press, 1990.

Vázquez Medel, Manuel Ángel, ed. *Francisco Ayala y las Vanguardistas*. Sevilla, Ediciones Alfar, 1998.

Zuleta, Emilia de. "Historia y ficción: Dos versiones de 'La campana de Huesca'". *Rrevista de literaturas modernas*. vol. 17, 1984, pp. 76–97.